

FLORA KANAGAWA

Dec. 25. 2003 No. 56

神奈川県植物誌調査会ニュース第56号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515・FAX 0465-23-8846

e-mail katsu@nh.kanagawa-museum.jp

郵便振替 00230-5-10195



ナツツバキ. 詳しくは本文697ページを参照.

吉田三夫:コゴメイについて	696
吉田三夫:川崎市におけるスゲ属の稀産種の生育環境について	696
逢沢峰昭:丹沢山塊のナツツバキの分布	697
浜口哲一:ツユクサの"角"	698
浜口哲一:湘南初記録のオオネバリタデ	700
浜口哲一:シマスズメノヒエの粘る実の正体	700
勝山輝男:帰化植物MLのやりとりで明らかになった神奈川県産帰化植物	701
秋山幸也:ハマネナシカズラの蒴果は花冠から裸出しない	703
和田良子・埜村恵美子・野津信子・佐々木シゲ子:横浜市内でヒロハウラジロヨモギ確認	705
木場英久:大山のナベワリ	706

コゴメイについて

(吉田三夫)

川崎市多摩区登戸に接する多摩川の河原でイグサ科イグサ属のコゴメイを、2003年6月20日に確認した。神奈川県で約100年ぶりに発見されたカヤツリグサ科のジョウロウスゲの生育地である。

コゴメイは、「神奈川県植物誌2001」の246頁に記載されていて、種の確定がなされていなく、学名が不明なもので、県下では横浜市保土ヶ谷区花見台で1994年に初めて発見されている。

コゴメイの大きな特徴は、茎をカミソリなどの鋭い刃で縦に割いてみると、白い髓が未発達で、梯子状であること、花穂がイなどよりかなり長く5~15cmになること、多数の花をつけることなどが挙げられる。

この河原でのコゴメイは、未だ群落を形成しておらず、単独で池の縁や水量の多い時は水中に点在していて、ときにはイと共に生育している。

標本を川崎市青少年科学館の収蔵庫に収めた。本県で2例目と言いたいだが、平凡社発行の「日本の帰化植物」(2003)に勝山輝男氏が2002年5月22日に川崎市で撮影したコゴメイの写真が載っていて、背景から推定すると、おそらく同一の場所のものであろうから、約1年遅れの確認になる。



コゴメイの花穂

川崎市おけるスゲ属の稀産種の生育環境について

(吉田三夫)

(1) ジョウロウスゲ

本種を発見されたのは神奈川県植物誌調査会会員の平川恵美子氏で、2001年6月1日のこと。場所は川崎市多摩区登戸近くの多摩川の河原であった。約100年ぶりの発見ということである。河原は植物で覆われ、植被率は90%を越えていた。

ところが、この河原は2002年終わってから2003年初



ジョウロウスゲ 2003.5.14

頭くらいにかけて工事が行われ、湿地は小さな池(沼)として残され、他はコンクリートの散策路と小石が撒かれた乾いた地面に改修された。国の関係者によると植生などの変化を今後見守っていくとのことで、ビオトープとして整備したと考えられる。

ジョウロウスゲが生き残ったか否かが気になり、4月から月2回の割合でこの河原の植物のデータをとった。可能なら花暦でもと考えている。ジョウロウスゲはともかくも元気であった。この湿地は面積が小さいために必要以上に手を加えられなかったことが幸いしたのかも知れないが、ヤガミスゲは姿を消してしまった。ジョウロウスゲは凹地の上の方の砂地にキシウブ、スカシタゴボウ、ユウゲショウ、クサヨシ等と共に生育しており、凹地の下の方にはヤナギタデ、オオカワデシヤ、カワデシヤ、ギンギシ、ケキツネノボタン、カンガレイ、コウガイゼキショウ、メリケンガヤツリ等が生えている。

2003年6月初め現在、池(沼)の周りは植物で覆われ青々とし初めている。池および散策路を除いた小石が敷き詰められて乾性化した河原にも、僅かながら植物が育ち始めている。元の植生に戻ることはないだろう。それよりも気になるのは、ジョウロウスゲに対する人為的干渉と水分条件である。

(2) オタルスゲ

川崎市多摩区生田緑地のハンノキ林のはずれの水田側のやや開けた湿地にヒメシロネ等と共に大きな株となって一株生育していたが、老朽化した木橋の立替えなどの工事等により姿を消してしまった。

その後、ハンノキ林近くの湿地ではなく、やや湿った場所にケシツネノボタン等と共に生育している小さな株のオタルスゲが見つかった。生田緑地は都市公園になっている為、散策路の近くは草刈りが定期的に行われる。この場所も草刈りされているが、今の所は無事ようである。

(3) ヒメゴウソ

川崎市麻生区早野は、お隣の横浜市青葉区寺家町の寺家ふるさとの森からそう離れていなく、ふるさとの森と同じ様にため池の多い場所であり、地形的には谷戸の多い場所でもある。谷戸の一つの一番奥まった「堤入池」は他の池と同様にフェンスが張りめぐられていて、その外側は散策路になっている。その散策路の斜面を登ると雑木林の林縁になる。この斜面にシラスゲ等に混じって同定できないスゲ属の植物が数株生育していた。2003年5月22日、とりあえず写真を数枚撮り、植物を採集した。

後日、植物体の一部、穂と幾つかの小穂を郵送して、神奈川県生命の星・地球博物館の学芸員・勝山輝男氏に見て戴いたところ、ヒメゴウソで、神奈川県では珍しいものとのことであつた。この場を借りて謝意を表したい。



ヒメゴウソ

丹沢山塊のナツツバキの分布

(逢沢峰昭)

丹沢山塊におけるナツツバキ (*Sturtia pseudocamellia*) の分布に関しては、林ほか(1961)に塔ヶ岳、丹沢山～本間ノ頭、幽神、玄倉などに稀に見られるのみであると記載されている。しかし、近年、勝山(2000)により西丹沢甲相国境の大棚の頭～菰釣山で発見されるまでは、丹沢山塊ではその分布が疑問視されていた(勝山ほか、1997)。また、林ほか(1961)の調査の際に採集された標本

の所蔵されている森林総研多摩森林科学園(TFA)における、逢沢(2003)の標本調査でも確認できず、林ほか(1961)に記載のある丹沢山塊の主稜線部ではこれまで確認されていなかった。

ナツツバキは近郊の御坂山塊ではよく見かけることから、筆者は丹沢山塊の主稜線部にもナツツバキが分布しているのではないかと思います。リュウブやナツツバキに特有なまだら模様をした樹幹を見た場合は、注意していずれの樹種かを確認するように努めてきた。その結果、蛭ヶ岳の北方にある袖平山の北尾根1150m附近でナツツバキを発見した。場所は袖平山から北尾根を下った際に、下に向かって右手側に大きなガレがあるところで、このガレの縁にナツツバキが二個体あった(主幹の胸高直径はそれぞれ19.8, 8.5cm)。周辺はミズナラ、ブナなどのほかにリュウブも多く見られる上、これらのナツツバキは株立ちしていることもあり、一見リュウブにもよく似ていた。このように、今後も注意して探せば丹沢山塊の主稜線部でもナツツバキは他にも見つかる可能性がある。今回採集したナツツバキの標本*は県博(KPM)におさめた。

なお、倉田(1974)には神奈川県にナツツバキの分布点があるため、東京大学総合博物館の標本を調べたが、丹沢山塊に最も近い産地では道志山塊の御正体山で採集された標本**があつたのみで、丹沢山塊の標本は確認できなかった。ただし、倉田(1971)には、林ほか(1961)に記載のあるクロベ、イラモミの分布点が神奈川県内にあることを考慮すると、このナツツバキの分布点は、林ほか(1961)の記載あるいは、この調査報告書をもとに作成された文献資料を引用した可能性が高い。

最後に、標本の閲覧を許可いただいた東京大学総合博物館の関係者の方々に厚くお礼申し上げます。また、ナツツバキに関する文献を提供いただいた生命の星・地球博物館の勝山輝男氏に心より感謝致します。

標本

*: 神奈川県津久井郡津久井町袖平山北尾根 標高1150m附近 2003.5.22 逢沢峰昭(KPM-NA0123463)

** : 甲斐・道志山塊 御正体山北側1400m 1957.6.21金井弘夫(TI)

引用文献

逢沢峰昭, 2003. 「林ほか(1961): 丹沢山塊の植物調査報告」の標本について. FLORA KANAGAWA (55): 673-683.

林 弥栄・小林義雄・小山芳太郎・大河原利江,
1961. 丹沢山塊の植物調査報告. 林試研報
133:1-128+1-16.

勝山輝男・高橋秀男・城川四郎・秋山守・田中徳
久, 1997. 丹沢山地の種子植物・シダ植物.

丹沢大山自然環境総合調査報告書, pp. 331-
382. 神奈川県.

勝山輝男, 2000. 神奈川県植物誌備忘録(2) ナ
ツツバキ. FLORA KANAGAWA (49): 567.

倉田 悟, 1971. 原色日本林業樹木図鑑第1巻
(二版). 地球出版, 東京.

倉田 悟, 1974. 原色日本林業樹木図鑑第2巻
(二版). 265pp. 地球出版, 東京.

ツククサの“角”

(浜口哲一)

ツククサの苞(正確には総苞)を開いてみたことのある方なら, 数花のついた花序の他に, “角”のような小枝が必ずあるのに気づかれたことだろう。図1のaとした部分で, これは苞の中にすっかり隠れていることも多い。ある観察会で, この角は何かという質問を受けた。質問者も植物に詳しい方だったので, 日頃私なりに考えていた, 少々ややこしい答えを披露してみた。それは, この角は茎bの延長の痕跡であり, そこに苞がつき, 苞の

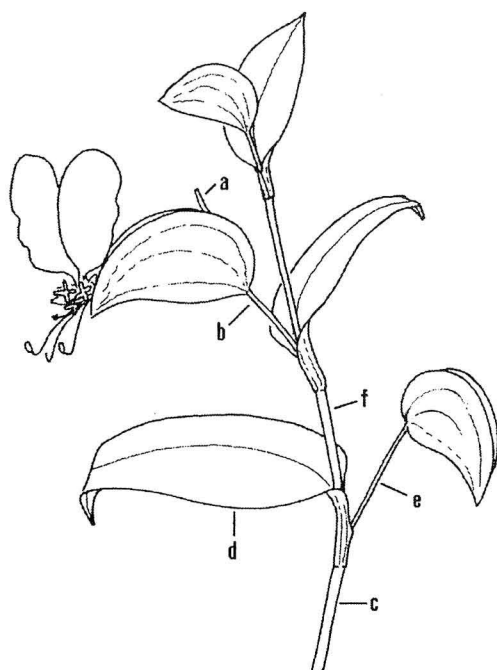


図1. ツククサの枝先における分枝のようす

腋から花序の枝が出ているのだ, という説明であつた。

なぜそう考えたかということだが, ツククサの枝先は多くの場合, 図1のようになっている。茎cに葉dがつき, その茎の延長はeとなって花序で終わっている。一方, dの葉腋から伸びた茎fの方が長く伸びて新しい軸になっているので, これはいわゆる仮軸分枝である。同じパターンが繰り返されるとみて, 茎bの延長が痕跡的にaの角となると考えたわけである。なお, 同じツククサでも茎の下方では分枝の仕方が違っていて, 葉腋につく枝の方が短くて花序で終わっていることもあれば, 両方がともに長く伸びていくこともある。

後になって, この説明で本当によかったのか? 気になっていくつかの本を開いてみると, 答えはそう簡単ではないことが分かった。県植物誌には記載がなかったが, 『横浜の植物』では大津任氏が「ふつつ2岐の花柄があり, うち1岐には花がつかないことが多い」と書かれていた。『原色野草観察検索図鑑』の図には「散った花の柄」というコメントがつけられていた。また『牧野新日本植物図鑑』には「総状花序の一番下の1枝は普通花はつかない」とあつた。つまり, この角は花柄だといふのである。

さらに『図解植物観察事典』には「苞葉の中には二またにわかれた上下2本の花柄がある。上方の花柄にはほとんどの場合花がつかず, 柄だけである。花がついている場合には1個だけついていて両性花であることが多いが, 雄花がつくこともある。花の有無や両性花がつくか雄花がつくかは,

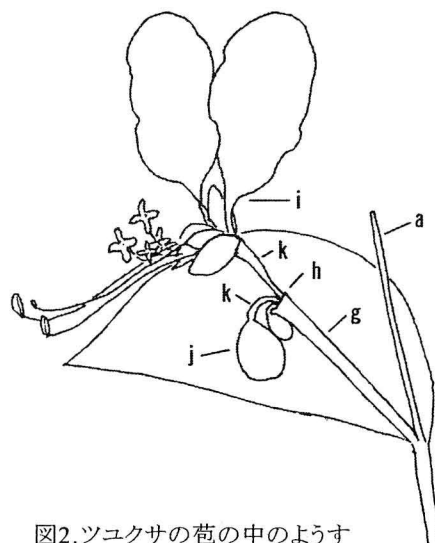


図2. ツククサの苞の中のようす

地域によってかなり違いがみられる。」と詳しく述べられていた。

これらの文献による花柄説と、私の考えた茎の延長説のどちらが妥当なのかよく考えてみたいと思い、この秋はツユクサに出会うごとに観察の目を向けてみた。その結果を紹介したいのだが、その前に苞の中を詳しくみておくと、図2のようになっている。aが問題の角、gが通常の花序の柄で、その先には関節があり(h)、そこに数花(i: 花、j: つぼみ)が集散状についている。それぞれの花には花柄(k)がある。

観察の結果、分かってきたことは、この角は実にいろいろな形態をとるということであった。その代表的な例を図3に示したが、先細りになって終わるAタイプがもっとも多い。先端につぼみの痕跡のようなふくらみがついているBタイプも稀に見られる。やや頻度が高いのはCタイプで、花が一つつき、開花時には通常の花序の花と2段咲きになるものである。『図解植物観察事典』の記述に従えば、この花は雌しべを持つ場合と欠く場合があることになる。また、ごくまれだが、もう一段小さな苞がつくDタイプも見つかった。

注目しておく必要があるのは、Cタイプの場合、角の途中に関節(l)が必ずあるということである。先に述べたように、ツユクサの通常の花序では、柄の先の方に関節があり、そこに短い柄を持った花がついている。ということは、aの角を花柄というのは不適切で、少なくとも花序の柄と呼ばねばならないことになる。さらに興味深いのは、Dタイプの存在である。私の見た範囲では、通常の花序でその関節に苞を伴うような事例は皆無であった。とすれば、角の方の花序と通常の花序を同等なものみなすよりは、茎の延長に別の花序がつ

くDタイプがいろいろな程度に退化したものがこの角の正体だと考える方が、より適切なのではないだろうか。先に述べた分枝のパターンということからも、この解釈の方がより包括的な回答であるように思える。また、図2の角aと花序の柄gの太さが明らかに異なることも、これらが同等なものではないことを示していると思える。

そこで、私としては、茎の延長説を改めて主張し、文章表現としては次のように説明したいのだが、どんなものだろうか。「ツユクサの花序は、茎の先端に位置する苞に包まれている。苞の中には、茎の延長が痕跡的に角状に残るが、時にはその先端に花がつくこともあり、ごく稀にその花が小型の苞を伴うこともある。」

自分としてはこれで解答が出たと思っているのだが、一つ問題が残っている。それは花の向きということである。ツユクサは3分の1の葉序を持っているので、ある節の葉と次の節の葉は120度方向が違う。従って、一節ずれた位置につく花の向きも大きく違っているのが普通である。しかし、CタイプでもDタイプでも、通常の花序の花とほぼ同じ向きに咲いているのが常であった。特にDタイプにおいて、小さな苞と花の向きの関係が、普通の場合と違うのが大変気になる。蕾の段階で大きな苞の中に畳まれている時に柄にねじれが生じるのかとも考えているのだが、ルーペで見ただけではそのあたりのことがよく分からない。この点は、また来年観察をしてみたいと思っている。また、小さな苞がついている場合、その上の花は花柄だけを持っているが、さらに数花がついて花序の柄を持つ場合があるのかとか、その時に角も現れるのかという点も興味が持たれる。

なお、言うまでもないことだが、ここに書いてきたことは、あくまで私の説に過ぎないので、何か違う見方があればぜひ教えて頂きたいと思う。

この観察をするにあたって三輪徳子さんから貴重な材料を提供して頂いた。また、「角」という表現は、松下弓子さんがふともらされた言葉をお借りした。お二人に感謝する。

参考文献

- 『横浜の植物』(横浜植物会, 2003)
- 『原色野草観察検索図鑑』(長田武正, 1981. 保育社)
- 『図解植物観察事典』(岡村はた他, 1982. 地人書館)
- 『牧野新日本植物図鑑』(牧野富太郎, 1961. 北隆館)

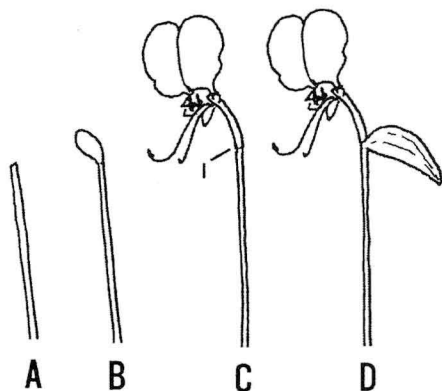


図3. ツユクサの「角」の諸形態

湘南初記録のオオネバリタデ

(浜口哲一)

古宮邦雄さんが平塚市土屋で採集されたタデ科の標本を、オオネバリタデではないかと持って来られた。さっそくネバリタデ *Persicaria viscofera* の標本と比較しながら調べてみると、確かにオオネバリタデ *P. makinoi* と考えられるもので、平塚市としても湘南ブロックとしても初記録になった。

古宮さんによると、採集地は雑木林が伐採されて1年ほど経つ日当たりのよい草地で、高さ1.3mほどの1個体が見られたという。

ネバリタデとの比較については、『県植物誌2001』に分かりやすい図(以下の文では「図」と表記する)が出ているが、若干補足すると次のような傾向がある。葉形の違いは図に示された通りで、これと関連することと思われるが、オオネバリタデの方が側脈の湾曲の度合いが大きい。葉の毛の長さは、ネバリタデでは2mm程度、オオネバリタデでは0.5mm程度で後者が明らかに短い。また裏面の毛は、ネバリタデでは全面に生えるのに対して、オオネバリタデでは脈上に限られる。葉縁にはオオネバリタデでも毛が生えているが、縁に沿った方向に伸びるので、一見すると毛がないようにも見える。葉鞘の毛は、図ではオオネバリタデの方が短いように表されているが、実際には2～3mmの長さがある、ネバリタデとの差はない。ただし、オオネバリタデの毛の方が柔らかいのか、途中で曲がっているものが多いように感じられた。また縁毛の長さは同程度で、有効な識別点はない。茎の毛のようすは図によく表現されている。また、花序の枝分かれの角度が、オオネバリタデの方が広いように感じられたが、1個体だけの観察なので断定はできないだろう。標本を提供された古宮氏に感謝する。

標本:平塚市土屋 愛宕山 2003.10.5 古宮邦雄
採集 標本番号HCM-56-90772

シマスズメノヒエの粘る実の正体

(浜口哲一)

2003年8月21日に、平塚市馬入の相模川河川敷を歩いていたら、ズボンのあちこちに濡れたような小さなしみがついているのに気づいた。何だろうとよく見ると、一つのしみに草の実がこびりついており、手にとってみると、それはシマスズ

メノヒエ *Paspalum dilatatum* の実であった。河原にはシマスズメノヒエがたくさん生えていて、それをかき分けるように進んだのだが、まさかその実がズボンに着くとは思ってもなかった。穂を触ってみると、確かに穎の表面がねばねばして手につくものが多かったし、茶色い粘液がしたりそうに見えるものさえあった。そこでまず考えたのは、シマスズメノヒエの実は、チヂミザサのように付着散布をするのではないかということであった。

ところが、9月9日に海老名市大谷を歩いたときにも、多くのシマスズメノヒエを見たのだが、穂が粘るのは1割程度で、乾いた状態で褐色に熟しているものが大半であった。そこで気づいたのは、この粘る実は正常ではなくて何か病気なのではないかということであった。同時に、菌類による穀物の病気で似たようなものがあると耳にしたことが思い浮かび、県立生命の星・地球博物館の出川洋介学芸員にサンプルを送って検討して頂くことにした。

その結果、シマスズメノヒエが感染し、粘液を生じた菌は、下記の種類だと同定して頂くことができた。また、粘液の中にはこの菌の不完全世代 *Sphacelia* 属の分生子が多数含まれていることが分かった。

子囊菌門 子囊菌綱 フンタマカビ亜綱
(Sordariomycetidae) ボタンタケ目 バッカ
クキン科

病名:ダリアグラス・バヒアグラス麦角病

菌・学名: *Claviceps paspali* Stevens & Hall

最初に気づいた馬入の相模川では、シマスズメノヒエへの感染率は少なくとも8割程度はあったと思われる。ここでは、少数のアメリカズメノヒエ



麦角病に感染して粘液を出しているシマスズメノヒエの穂(2003.10.5 平塚市馬入 相模川)

が混生しているが、こちらの種類には感染は認められなかった。また、たまたま同地をご案内した「かながわトラストみどり財団」の観察会で麦角病にかかっているらしいとお話したところ、ならば粘液が甘いのではと言われた方がいて、なめてみると確かに強い甘みがあった。お名前を確認し忘れたのだが、いろいろなことをご存じの方がいるものと感心した次第である。

粘るから付着散布と早とちりしたことは恥ずかしいが、結果的に思わぬ生きものの姿に接することができたのは貴重な体験であった。同定をして頂いた出川氏に感謝する。なお、この粘液が原因でできたしみの後始末はなかなか厄介で、ズボンをクリーニングに出す羽目になったので、ご注意ください。

帰化植物MLのやりとりで明らかに なった神奈川県産帰化植物

(勝山輝男)

帰化植物MLは電子メールを利用した帰化植物に関するリアルタイムの情報交換を目的に、農林水産技術会議事務局センターのサーバー上に森田弘彦氏(独立行政法人農業技術研究機構九州沖縄農業技術センター)を管理者として、2002年1月に開設されたメーリングリストである。2003年5月時点で約370名が参加し、帰化植物に関するさまざまな情報交換が行なわれている(森田, 2003. メーリングリストで読む帰化植物の最近の動向. 植調, 37: 157-166). 筆者も帰化植物の分類に関する書き込みを時々行なっているが、そのやり取りの中で明らかになった神奈川県産の帰化植物に関して報告する。なお、帰化植物MLへ参加するには管理者宛(naturplant-admin@ml.affrc.go.jp)に電子メールで申し込む必要がある。

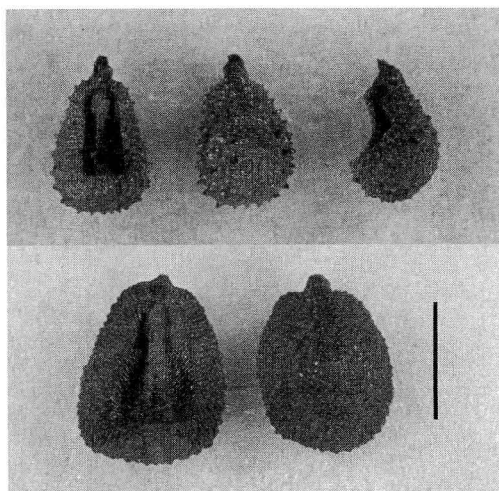
1. コモチナデシコとイヌコモチナデシコ

コモチナデシコとイヌコモチナデシコの違いがはっきりしないので、悩んでいた方は多いのではないと思う。私も前から疑問に思っていたので、帰化植物MLに両者の区別がわからないとの書き込みがあったのをきっかけに調べてみた。「神奈川県植物誌2001」ではイヌコモチナデシコのみが記録され、その後、横浜市港南区でコモチナデシコと思われるものが採集されている(田中, 2003. 横浜の植物, p.567). 県博に収められている標本とBall & Akeroyd(1993, Flora Europae 2ed. Vol.1: 225-227)の*Petrorhagia*属の検索表や記述を比較検討した。

その結果、無毛の茎と種子でコモチナデシコ*Petrorhagia prolifera* (L.) P.W.Ball & Heywoodは明らかに区別でき、県博の標本では厚木市関口産(厚木-2)の標本2点(1995.6.24 高橋秀男 KPM-NA1107431 & KPM-NA1107599)がコモチナデシコであった。また、イヌコモチナデシコの学名には従来*P. nanteulii* (Burnat.) P.W.Ball & Heywoodがあてられてきたが、これは*P. velutina* (Guss.) P.W.Ball & Heywoodの誤りか、あるいは両者が含まれている可能性がある。少なくとも今回検討した神奈川県産のイヌコモチナデシコおよび長田(1976, 原色日本帰化植物図鑑, 保育社, p.308)に図示されているイヌコモチナデシコは*P. velutina*である。これについては勝山(2003. 帰化植物ML, No.1009)に報告した。

以下にコモチナデシコ*P. prolifera*, *P. nanteulii*, *P. velutina*の検索表を示す。

- A. 茎に腺毛がある。葉鞘の長さは幅の2倍以上。
種子は長さ約1mm, 背面には三角錐状の突起がある *P. velutina* (イヌコモチナデシコ?)
- A. 茎に腺毛はない。葉鞘の長さは幅の2倍以下。
種子は長さ1.3mm以上, 背面は網目状または結節状
- B. 茎は有毛。葉鞘の長さは幅の2倍以下。種子の背面は結節状
..... *P. nanteulii* (イヌコモチナデシコ?)
- B. 茎は無毛。葉鞘の長さは幅とほぼ同じ。種子の背面は網目状
..... *P. prolifera* (コモチナデシコ)



P. velutina (イヌコモチナデシコ?) (上段)とコモチナデシコ(下段)の種子。スケールは1mm。

県博の標本には *P. nanteulii* は含まれていなかったが、水田 (2003. 帰化植物ML, No.1013) や植村 (2003. 帰化植物ML, No.1015) によると、*P. nanteulii* も帰化している可能性があるとのことである。イヌコモチナデシコの和名は長田 (1972. 日本帰化植物図鑑, 北隆館, p.156) で新称されたものである。長田 (1976. 原色日本帰化植物図鑑, 保育社, p.308) のイヌコモチナデシコは記述・図ともに腺毛が明記されており、明らかに *P. velutina* であるが、長田 (1972) では「茎は・・・下部を除き細かい立毛を密生する」とあり、図にも腺毛は書かれていないので、*P. nanteulii* の可能性を否定できない。したがって、これまでイヌコモチナデシコとされてきた標本や長田 (1972) の参考標本を再検討し、*P. nanteulii* が本当に帰化しているかどうか確認する必要がある。

2. フトエバラモンギク *Tragopogon dubius* Scop.

バラモンジン属 *Tragopogon* L. は日本に自生ものではなく、紫色花のバラモンジン *T. porrifolius* L. と黄色花のバラモンギク *T. pratensis* L. の2種の帰化が報告されていた。帰化植物MLのやりとりで、黄色花のバラモンジン属にもう1種、*T. dubius* Scop. が北海道江別市や長野県松本市などに帰化していることが明らかになり、勝山 (2003. 帰化植物ML, No.1153) でフトエバラモンギクの和名を提案した。

ところで、「神奈川県植物誌2001」にバラモンジン属は出ていないが、県博の標本をチェックしたところ、横浜市中区山下埠頭で採集されたフトエバラモンギクの標本 (1987.05.07 浜中義治 KPM-

NA1100411) があった。また、湘南植物誌VI p.177 にはバラモンギク *T. pratensis* L. の記録 (秦野3 曾屋 1998.07.12 金井 HCM-75795; 秦野5 寿町 1997.05.15 梅木 HCM-73018) があるが、時間がなくまだ見ていない。これについてはバラモンギクなのか、フトエバラモンギクなのかチェックする必要がある。

以下に日本に帰化しているバラモンジン属の検索表を示す。

A. 花は紫色。冠毛は淡褐色～褐色

..... バラモンジン *T. porrifolius*

A. 花は黄色。冠毛は白色～淡褐色

B. 花茎上部は太くならない。総苞片は8個

..... バラモンギク *T. pratensis*

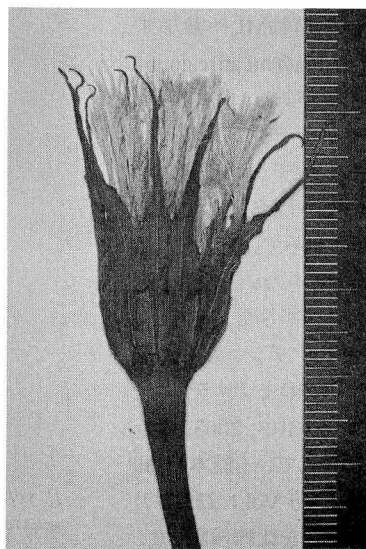
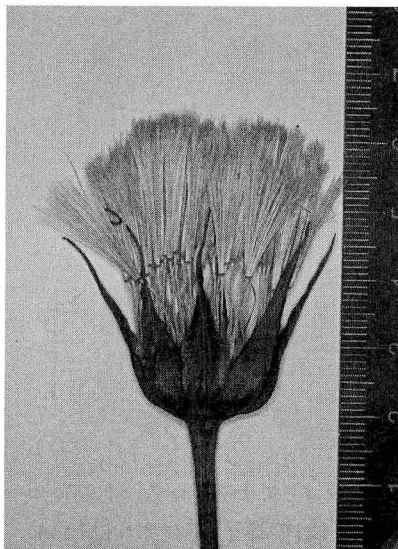
B. 花茎上部は著しく太くなる。総苞片は8-13個

..... フトエバラモンギク *T. dubius*

なお、バラモンギク *T. pratensis* にはキバナムギナデシコ、キバナザキバラモンジン (牧野図鑑) の別名があるが、キク科フタナミソウ属のキクゴボウ *Scorzonera hispanica* L. の別名にキバナバラモンジンがあるのでまぎらわしい。

3. トキワツユクサとオオトキワツユクサ

トキワツユクサ (ノハカタカラクサ) *Tradescantia fluminensis* Vell. は園芸植物のシラフハカタカラクサの斑が消えたもので、「神奈川県植物誌2001」の調査では過去10年間で著しく分布を拡大した帰化植物の1つである。帰化植物MLでトキワツユクサに結実するタイプと結実しないタイプがあること、それからオオトキワツユクサ *Tradescantia albiflora* Kunth も帰化していることが話題になっ



バラモンギク(左)と
フトエバラモンギク
(右)の総苞

た。そこで、県博の標本を再度チェックしてみた。

まず、オオトキワツユクサは園芸植物のシラフツユクサの斑がなくなったもので、県内では会員の支倉千賀子氏が川崎市宮前区の野川神社で野生化しているものを採集し、当時和名がわからなかったで、トラデスカンティア・アルビフロラの名で標本を収められている(1999.05.28 KPM-NA0120317)。この標本は栽培の逸出レベルということで、「神奈川県植物誌2001」では取り上げられなかったようだ。

しかし、県博に収められたトキワツユクサの標本を再チェックしたところ、川崎市幸区北加瀬 1996.06.12 武井尚 KPM-NA0104068, 横浜市鶴見区北寺尾 1979.06.23 森茂弥 KPM-NA1068453, 横浜市西区久保山 1981.07.28 村上 司郎 KPM-NA1068455, 横浜市中区本牧埠頭 1983.05.05 村上 司郎 KPM-NA1068456, 横浜市港南区日野墓地 1983.05.03 村上 司郎 KPM-NA1068457, 鎌倉市山ノ内(KA-1) 1983.07.13 浜中 義治 KPM-NA1068463, 葉山町一色 1986.06.01 浜中 義治 KPM-NA1068465, 湯河原町宮下(YU-1) 1986.04.05 米山 智恵子 KPM-NA1068442 の8点の標本がオオトキワツユクサであった。これだけ採集されていると、逸出レベルとして放置できないように思う。県博以外の標本も再度チェックする必要がある。

オオトキワツユクサは葉が長さ7-12cmあり、園芸植物のシラフツユクサを見慣れている人は間違えることはないと思うが、帰化植物図鑑などで紹介されることがないので、トキワツユクサに紛れてしまったようだ。葉が大きいことの他に、各部分の毛が太くて長い。例えば、萼の背に生える毛はトキワツユクサでは長さ0.5mm以下であるが、オオトキワツユクサでは長さ1mmある。茎の上部に生える毛や葉の縁の毛もトキワツユクサに比べて、オオトキワツユクサでは倍くらいの太さと長さがある。このため、葉の縁の毛はトキワツユクサでは肉眼で見えないが、オオトキワツユクサの葉の縁の毛は肉眼でも認められる。

次にトキワツユクサと判断されたものには、前述したように結実するタイプと結実しないタイプが認められた。結実するタイプは葉が卵形でやや小さく、葉の裏が紫色を帯びるもので、県博標本では15点の標本があった。結実しないタイプは葉がやや大きく、長いものでは長さ6cm、多くは長さ3-4cm

のもので、葉の裏面は緑色である。こちらは18点の標本があった。植村(2003. 帰化植物ML, No.1427, 1466, 1469)によると、*T. fluminensis*の園芸品種のうちシロフハカタカラクサの斑が抜けたものが、葉の裏が緑色の結実しないタイプで、これがもっとも野生化している。一方、葉の裏が紫色の結実するタイプは園芸品種のcv. *tricolor*またはcv. *laekenensis*の緑葉になったものと推定され、こちらは野生化しにくいという。

ハマネナシカズラの蒴果は花冠から裸出しない

(秋山幸也)

筆者は『神植誌2001』において、ネナシカズラ属 *Cuscuta* の識別点を、花時、果時、雄しべと鱗片の図によって示した(p. 1163)。最近になり、松本雅人氏がハマネナシカズラ *C. chinensis* を採集し(横浜市瀬谷区上瀬谷, SE, 5339-13-88, 2003.10.28, SCM16861)、それを調べる過程で当該の図が誤っていることに気付いたので報告したい。

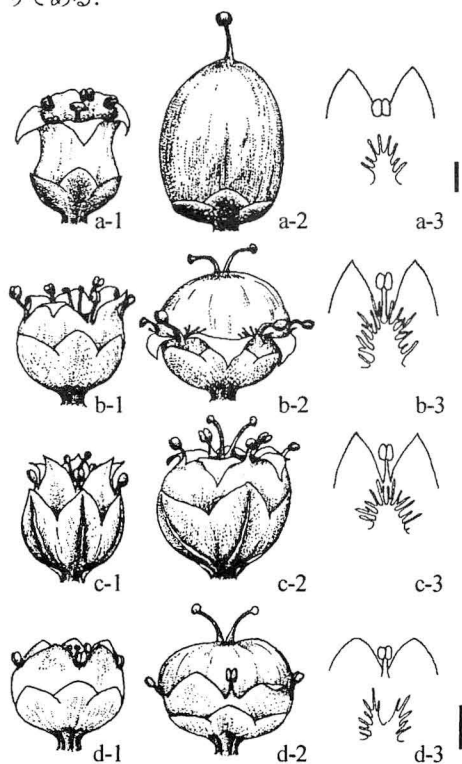
ハマネナシカズラは近年の採集例が全国的にも少なく、県内に至ってはこれまで、宮代コレクション(横浜こども植物園収蔵)の中に1925年と1940年の標本が数点ずつ確認できているだけであった(宮代コレクション植物標本目録作成編集委員会, 2001)。『神植誌2001』の執筆中はこのような状況で、標本を多く見ることなく作図したため、誤って描いてしまった。

最も大きな間違いは1163頁c-2図で、蒴果が花冠裂片から裸出してしまっていることである。他にも、雄しべが短いこと、花冠内部の鱗片が小さいことも誤りである。また、マメダオシの雄しべも実際よりも短く、これらを訂正すると図のようになる。蒴果が花冠から裸出しないことは大井植物誌等でも既に指摘されており、筆者の注意力不足であった。萼の中央脈が隆起して見えることと併せると、本種はこの属の中では比較的容易に同定できることもわかった。これらを踏まえて、改めてネナシカズラ属の類似した3種の識別について整理する。

アメリカネナシカズラ *C. pentagona* は鱗片が二裂せず、萼が膜状で平坦、中央脈が隆起しない。雄しべの長さに他種との大きな差は無く、この点は識別点にならない。また、本種は果時に、鱗片が花冠の外へはみ出て見えることが多い。

マメダオシ *C. australis* は、花冠裂片がやや鈍頭で短いことと、花冠内部の鱗片が大きく二裂することが特徴であるが、特にアメリカネナシカズラとの識別は非常に難しい。『神植誌2001』を含め、図鑑によっては雄しべが短く描かれているが、地球博および国立科学博物館の標本を見たところ、他種と大きな差は見られなかった。花冠裂片の形状も花によって差があり、鋭頭に見えるものもあるため注意を要する。鱗片はアメリカネナシカズラと比べると花冠の下方、基部近くにつくため、花冠外側からははみ出て見えないことが多い。この識別点は、乾燥標本を解剖できない場合に有効と思われる。ハマネナシカズラとは、前種とともに、果時に蒴果が大きく裸出する点で容易に区別できる。

ハマネナシカズラの重要な識別点である萼片の中央脈の隆起は、乾燥状態ではわかりにくいものの、生品では比較的明瞭である。乾燥時は隆起して見えなくても、色が中央部分のみ濃く見えて硬質となる。以上の点を考慮した検索表は次のとおりである。



a: ネナシカズラ, b: アメリカネナシカズラ, c: ハマネナシカズラ, d: マメダオシ, 1: 花時, 2: 果時, 3: 雄しべと鱗片。スケールは1mm。

- A. 花柱は合着し、1個 ネナシカズラ
 A. 花柱は離生し、2個
 B. 萼片の中央が脈状に隆起し、蒴果は熟しても花冠から裸出しない ハマネナシカズラ
 B. 萼片は膜状で平坦、蒴果は熟すと花冠から大きく裸出する
 C. 花冠内部の鱗片は大きく二裂せず、果時には雄しべの基部付近から花冠の外へはみ出て見えることが多い ... アメリカネナシカズラ
 C. 花冠内部の鱗片は大きく二裂し、果時にも花冠からはみ出ない マメダオシ

余談になるが、国立科学博物館の標本を見たところ、ハマネナシカズラは図鑑の記載にもあり、確かにハマゴウに寄生した海浜からの採集品が多い。しかし、今回採集されたのは横浜市の内陸に位置する上瀬谷の畑地であり、イノコヅチに寄生していた。これは、和名を裏切って内陸へも分布拡大する可能性を示唆している。ネナシカズラ類は爆発的な繁殖力を持つせい、マメダオシやアマダオシ、ハマネナシカズラなど、特定の寄主植物や環境に依った和名がつけられる傾向にある。しかし考えてみると、多くの場合草本植物に寄生し、寄主を枯死に至らしめるネナシカズラ類が、寄主特異性や立地の特異性を持つ利点は少ない。むしろ“マメ”や“ハマ”というのは、分散や移入の経路の特徴を示していると考えの方が自然であろう。

また、アメリカネナシカズラは、1970年頃から東京などで異常繁殖が見られるようになってきたとされるが(浅井, 1975)、国立科学博物館では1937年の標本を確認した(山口県長府, TNS58175)。これは突出した例であるが、1960年代の標本も散見された(1960年, 石川県, TNS364278など)。浅井も前出の論文中で指摘しているが、本種はかなり古い侵入歴を持つことが推測される。

ネナシカズラ類は、茂った状態ならたいてい花と蒴果が混在しているので、標本として採集される際は特に蒴果が入るよう、さらに、からみつかれた寄主植物ごと採集することが望ましい。筆者はネナシカズラ類の刹那的な繁殖生態や、いまだ疑問符の残る分類に興味を持っており、引き続き取り組んでいきたいと考えている。今後も会員の皆様には情報をお寄せいただけるよう、お願いする次第である。

標本閲覧の機会を与えてくださり、引用について

ご指導下さった国立科学博物館の近田文弘博士
及び秋山忍博士、文献についてご教示頂いた神
奈川県立生命の星・地球博物館の勝山輝男主任
学芸員に感謝いたします。

引用文献

浅井康宏, 1975. 新らしく日本に帰化したアメリカ
ネナシカズラ(新称)について. 植物研究雜
誌, 50(8): 238-242.

宮代コレクション植物標本目録作成編集委員会,
2001. 宮代コレクション植物標本目録. p.157.
横浜市緑政局.

横浜市内でヒロハウラジロヨモギ確認

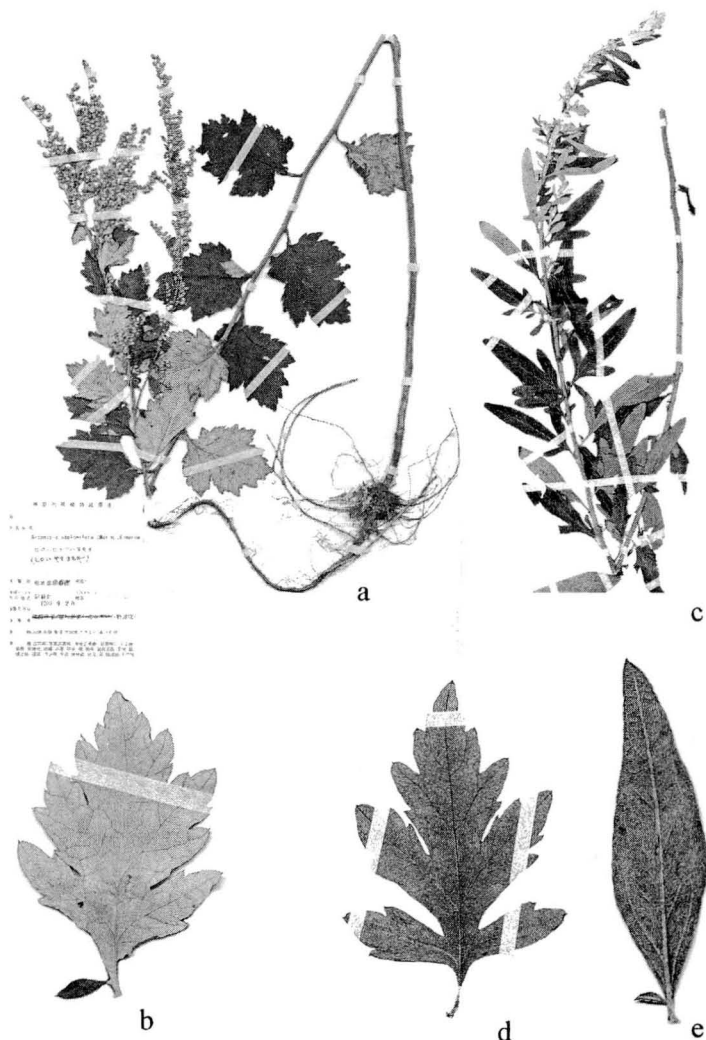
(和田良子・埜村恵美子・
野津信子・佐々木シゲ子)

2002年9月22日, 横浜市戸塚区俣野町の泉区と
の境にある遊水地を訪れた. この時イワヨモギ, カ
ワラヨモギ, ヒメヨモギといっしょに大型のヨモギ類と
もヤナギ類とも見られる植物が土手の法面上方に
8株あるのに気が付いた. 葉をちぎってにおいをか
ぐとヨモギより強い芳香がした. 10月19日に蕾, 11
月20日に満開の状態で標本を作製し, 横浜市子ど
も植物園にヒロハヒツバヨモギ(ヒロハヤマヨモギ)

Artemisia stolonifera (Maxim.)
Kom.として提出した. 私達はこの遊水地を2003年の花ご
よみ観察地とした.

その後, 熊本県阿蘇郡に
ヒロハヒツバヨモギが自生
していることを知り, 2003年6
月8日環境省自然環境局及
び阿蘇地区パークボランテ
ィアの会主催の「阿蘇の自
然に親しむ集い」に参加し
た. 花阿蘇美から大観峰へ
のコースを歩きヒロハヒツ
バヨモギを教えていただき,
多くの自生を確認した. しか
し, このヨモギは遊水地のも
のとは, 違うように思えた.
花は付いていないが標本に
した. 9月28日同会主催の
観察会に再び参加し, 花の
付いた標本を作製した(採
集場所 阿蘇郡高森町).

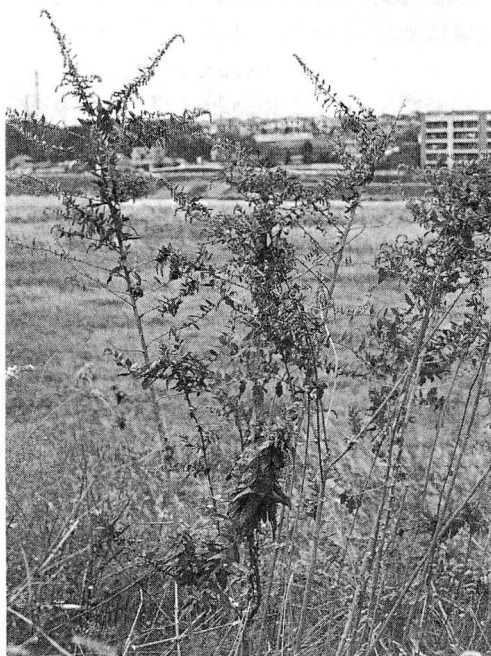
一方, 遊水地では, 2003年
6月21日, 7月26日と8月30日
(高さ180cm)に葉のみ, 10
月18日(240cm)に蕾のつい
た状態の標本をそれぞれ作
製した. あらためて前述の昨
年ヒロハヒツバヨモギとして
提出した標本, 横浜市子ど
も植物園の宮代コレクション
のヒロハヒツバヨモギの標
本(中国・安東 1927.9.7.
YCB301950, 安東 1928.9.



a: 阿蘇のヒロハヒツバヨモギ(全体), b: 同(葉), c: 俣野遊水地の
採集品(全体), d: 同(基部の葉), e: 同(上部の葉).

YCB302046)と阿蘇の9月採集の標本とを比較、検討した。遊水地のヨモギは花軸に密に花を付け、総苞にわた毛が密生し、葉の裏には灰白色のくも毛が多くて、葉の質が厚い。葉は若いうちは羽状に深裂しているが、成長するにつれ、茎の上の方につく葉は裂片が減り、上方ではほぼ全縁になる。花が咲く頃になると、基部の葉は落ちてしまう。木質化して太くなった茎の先に全縁の細い葉がついている様子は、まるでヤナギのようにもみえた。

以上の特徴から遊水地のヨモギはヒロハヒツ



俣野遊水地の植物。上: ヒロハウラジロヨモギ(2003.11.28), 下: ルリハッカ(2003.9.3)。

バヨモギではなく、ヒロハウラジロヨモギ(オオワタヨモギ) *A. koizumii* Nakaiと考えられた。その後、県博のヒロハウラジロヨモギの標本(北海道厚岸郡1976.8.14. KPM-NA0075188, 北海道北見国1975.8.29. KPM-NA0006880他数点いずれも北海道産)と比較した結果、草丈と花期以外は符号した。ヒロハウラジロヨモギは県内新産である。

私達が花ごよみの調査地にしている俣野遊水地は、このヨモギ以外にルリハッカ(県新産)、カラサイコ(横浜新産)など比較的にめずらしい植物が見られる場所である。

大山のナベワリ

(木場英久)

2003年5月2日伊勢原市の大山山麓(伊勢原-1)で調査会会員の森川美也子さんがナベワリ *Groomia heterosepala* (Baker) Okuyamaを採集された(KPM-NA0123461)。

ナベワリは、県内では、箱根、小田原、湯河原、南足柄など、箱根とその周辺に多いため、県のレッドデータ対象種にもされていないが、丹沢では珍しい植物である。「丹沢目録61」には大山、札掛、ユージン、世附の産地があげられていたが、「神植誌1988」の調査のときも採集されていなかった。その後、1997年に秦野-2で佐々木あや子さん(FK (45): 502)と、1999年に秦野-4で城川四郎さんが採集されていて、「神植誌2001」のナベワリの分布図をみると、丹沢地域には2つの黒い分布点被打たれているだけであった。

佐々木さんは本誌45号に載せた報告の最後に「かつての分布地である大山での再発見も期待できるかもしれない」と予想しているが、今回それが現実のものとなったわけである。では、佐々木さんにならって・・・次は世附での再発見を期待したい。

総会のご案内

今回の総会は2004年4月4日(日)午後1:30～4:00に横須賀市自然・人文博物館で開きます。次号は総会のときにお渡ししたいと考えております(・・・なんて書かないほうがよかったかな)ので、みなさんぜひご投稿くださいますようお願いいたします。

また、横須賀市博では、2月28日～5月31日まで、特別展「三浦半島の花と緑」を開催しています。